

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

ロニートとエステイ 彼女たちの選択

2017年/イギリス映画
邦給：ファントム・フィルム/114分

2020 (令和2) 年2月10日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・共同脚本：セバスティアン・レリオ
原作：ナオミ・オルダーマン
『Disobedience』
出演：レイチェル・ワイズ/レイチェル・マクアダムス/アレックス・サンドロ・ニヴォラ/アントン・レッサー/バーニス・ステジャース/アラン・コーデューナー/ニコラス・ウーデソン/リザ・サドヴィー/クララ・フランシス

👁️👁️ みどころ

近時、男女を問わず同性愛の映画が多いが、私は男同士のそれは苦手。他方、『アデル・ブルーは熱い色』『中国の植物学者の娘たち』『サマリア』のような10代の女の子のそれは大好きだが、成熟した女同士のそれは如何に？

邦題は単純でわかりやすいが、「不服従」を意味する原題の『Disobedience』は、その解釈が難しい。しかも本作では、その舞台が厳格なユダヤ教のコミュニティである点がミソだ。

さあ、久しぶりの再会の中で同性愛を復活させた“Wレイチェル”の最終の選択は如何に？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■原題は？原作は？不服従？それとも選択？■□■

本作のタイトルは、レイチェル・ワイズがロニート役で、レイチェル・マクアダムスがエステイ役で共演した映画だから『ロニートとエステイ』。そして、女同士の同性愛に悩むストーリーの中で、最後に見せる彼女たちの選択がテーマだから、副題が『彼女たちの選択』。なるほど、それならたしかにわかりやすいが、本作の原題『Disobedience』とは一体ナニ？また、本作の原作もイギリス人の女流作家、ナオミ・オルダーマンの同名小説『Disobedience』だ（未邦訳）。

本作のパンフレットにある、小説家・王谷晶氏の COLUMN 「獣でなく、天使でもなく」によれば、「Disobedience」は耳慣れない言葉だが、辞書をひくと不服従、反抗とある、らしい。しかし、タイトルは不服従ではなく、選択だし、劇中「反抗」というフレーズは使われず、「選択」という言葉が繰り返して使われる。そこで、同 COLUMN では、「神や世間

や家族に魂のあちこちを掴まれているロニートとエスティは、今にも抑圧に押しつぶされてしまいそうに弱く見える。けれど、それでも服従しないことを選ぶことができるのが、人の人たるゆえんで、強さなのだ。」と書かれているので、それに注目！

1996年の「アーヴィング VS リップシュタット事件」をテーマにした映画『否定と肯定』(16年)における「否定」と「肯定」は難しい言葉だった(『シネマ41』214頁)。また、『ハンナ・アーレント』(12年)にいう「悪の凡庸」も難しい概念だった(『シネマ32』215頁)。それと同じように、本作の原題であり、原作でもある「Disobedience」を「不服従」と訳すのか、それとも「選択」と訳すのかは難しい。王谷氏のように、「服従しないことを選ぶ」と両者をくっつけしまうのは、私には少し安易すぎる解釈にも思えるが、さてあなたのご意見は？

■□■超正統派とは？シナゴークとは？ラビとは？■□■

ユダヤ教とキリスト教の違いさえよくわからない日本人には、本作のポイントとなる「超正統派」「シナゴーク(ユダヤ教会)」「ラビ」等の言葉はわかりづらい。本作冒頭は、超正統派(ハラディー：イザヤ書66章2節「私(神)のことにばにおのく人」の意味)のシナゴーク(ユダヤ教会)で説教中の指導者のラビ(アントン・レッサー)が突然倒れこみ、死亡してしまうシーンから始まる。ラビとは、ユダヤ律法学者で超正統派の指導者のことで、彼は本作の一方の主人公ロニートの父親だ。このシーンを見ていると、その舞台は一瞬イスラエルかと思ってしまったが、そうではなく、ここはれっきとしたロンドン。そして、次の場面は一転してアメリカの写真スタジオに飛び、写真家のロニートが全身にタトゥーを施した男性の写真を撮っているシーンとなる。

この対比も日本人には理解が難しい。これは、タトゥーが御法度とされ、戒律に厳しいラビたちが生きているユダヤ教の世界と、何でもありの中でロニートが生きている自由なアメリカ社会を対比したものだが、さて、私を含め、日本人の観客はその意味をどこまで理解できるだろうか？

■□■Wレイチェルの別れと再会は？2人の演技力に注目！■□■

本作は“Wレイチェル”の共演が大きな話題だが、幼馴染だったロニートとエスティはなぜ別れたの？近時の「何でも説明調」の邦画と違い、本作では、幼馴染だったロニートとエスティがなぜ別れたのか、ロニートがラビの父親からなぜ父娘の縁を切られたのか、について何も語られないし、回想シーンも登場しない。しかし、2人の間に何か深い事情があったことは、Wレイチェルが再会した後のやり取りから容易に想像することができる。

ロニートは今、ニューヨークを舞台とする女流カメラマンとして成功し、自由気ままな生活を送っていたが、エスティの方は厳格なユダヤ人コミュニティの方にとどまっていた。Wレイチェルのうち、レイチェル・ワイズの方は、古くは『スターリングラード』(01年)

『シネマ 1』8頁)、『ナイロビの蜂』(05年)、『シネマ 11』285頁)、『アレクサンドリア』(09年)、『シネマ 26』130頁)等で、近時は『否定と肯定』(16年)、『シネマ 41』214頁)、『喜望峰の風に乗せて』(17年)、『シネマ 43』未掲載)等でずっと主演を張ってきた大女優。『女王陛下のお気に入り』(18年)における女王の側近サラ役では、第91回アカデミー賞助演女優賞にノミネートされている(『シネマ 43』25頁)。他方、レイチェル・マクアダムスは、『きみに読む物語』(04年)のヒロイン役で注目を集め(『シネマ 7』112頁)、近時は第88回アカデミー賞作品賞を受賞した『スポットライト 世紀のスcoop』(15年)、『シネマ 38』48頁)で助演女優賞にノミネートされているから、こちらも実績は十分だ。

本作は、ラビの死亡後、1人でロンドンのユダヤ人コミュニティに戻ってきたロニートを、エステが温かく迎え入れる風景を描写していく。ラビの息子のような存在で、ラビの後継者と噂されている幼馴染のドヴィッド(アレクサンドロ・ニヴォラ)は、突然のロニートの帰国にビックリしたが、もちろんそれを露骨に示すはずはない。ロニートはロンドンの新聞の死亡欄に「ラビには子供がいない」と書かれていることに憤ったが、久しぶりに再会したエステやドヴィッドとの会話は?ニューヨークの新聞記事にラビの死亡記事はなかったのに、ロニートがラビの死亡を知ったのはなぜ?誰がロニートにラビの死亡を知らせたの?そしてなぜ、ロニートはここに戻ってきたの?

本作では、ロニートがユダヤ人コミュニティを離れた後、互いの道を確立していたはずの3人の大人たちがいかに再会するのかが、導入部の注目点だ。エステはロニートからの「結婚しているの?」「お相手は?」の質問に答えないうままお茶の世話や宿泊の世話をしていたが、そこにドヴィッドが登場し、今はこの2人が夫婦になっていることを知ると・・・?そこで、女同士のどんな火花が飛び交ったのかを含めて、ウィキペディア上で「本作は批評家から絶賛されている」と書かれている本作導入部のそんな展開をしっかりと味わいたい。

■ 10代の女の子の同性愛 VS “Wレイチェル”の同性愛 ■

本作はWレイチェルが共演した同性愛の映画だが、女同士の同性愛の映画と聞けば、私はすぐに次の3作を思い出す。すなわち、①フランスでは『アデル、ブルーは熱い色』(13年)、『シネマ 32』96頁)、②中国では『中国の植物学者の娘たち』(05年)、『シネマ 17』442頁)、③韓国では『サマリア』(04年)、『シネマ 7』396頁)。これらは、いずれも10代の女の子たちの未熟な性(?)の物語だった。男同士の同性愛映画は、アン・リー監督の『ブロークバック・マウンテン』(05年)、『シネマ 10』262頁)をはじめたくさんあるが、私は基本的に好きではない。逆に、キレイな女優が登場する女同士の同性愛映画は大好きだが、本作は10代の女の子の未熟な性ではなく、女盛りの(?)美女2人の同性愛映画だから、なおさら興味深い。もっとも、そんな興味本位の視点はエロじじい特有のも

ので、本来の映画ファンのものではない。そのことは十分自覚しているが、それでも興味本位の興味を持つのは仕方がない。

他方、前述した王谷晶氏の COLUMN は、「私も同性愛者であることをカミングアウトしている」王谷氏なればこそその重みと説得力があるので、これは必読！女子高生同士の同性愛を描いた、前述した3作の性愛シーンはそれぞれ絶品モノだったが、それに対比すると、W レイチェルが魅せる本作での成熟した女同士の性愛シーンは？それは本作中盤のホテルのシーンでタププリ楽しみたいが、それが女子高生の性愛シーンと大きく違っているのは当然だ。その点について、王谷氏は「劇中かなり情熱的なセックスシーンがある」と指摘しながらも、「私はそっちよりこの『選択肢がなかった』がクライマックスだと感じた」と書いている。つまり、ロニートもエスティも、本作の原題である「Disobedience」＝「不服従」を「選択することができること」が、「人の人たるゆえんで、強さなのだ。」というわけだ。

さらに、王谷氏の興味の対象（論点）は、「愛に性別は関係ない」というフレーズにもあるらしい。それについては、「ロニートのセクシュアリティは明言されていないが、エスティは同性しか愛せないレズビアンとして描写されている」と書いているが、もともと同性愛に興味のない私は、このフレーズにあまり興味はない。しかし、本作で W レイチェルが演じた同性愛を考えるについてはこの視点も不可欠で、王谷氏の分析では、「皮肉なのはロニートが大都会で自由に暮らし、エスティは厳格なユダヤ教徒コミュニティで男性と結婚し生活していること」になるらしい。なるほど、なるほど、同性愛も考えてみれば、奥が深いわけだ。

しかして、久しぶりにユダヤ教徒のコミュニティに戻ってきたロニートと再会したエスティは今や夫を持つ身になっていたが、再び2人の同性愛の復活はあるの？2人とも分別のある大人だから、そんなことが起きるはずはない。そう考えるのが普通だが・・・。

■□バレたらヤバイ！もう少しうまくできないの？■□

弁護士を45年もやっていると、離婚事件もたくさん手掛けてきたのは当然。近時の映画でもローラ・ダーンが第92回アカデミー賞助演女優賞を受賞した『マリッジ・ストーリー』（19年）は、タイトルとは正反対の離婚風景が興味深かった。私が手掛けた事件でも、映画やドラマにできるようなドラマティックな展開を見せるものもある。ロニートともエスティとも幼馴染だったドヴィッドは、エスティがかつてロニートと同性愛の関係にあったことは知っていたが、分別あるエスティが、再会したロニートと再びそんな関係になるとは夢にも思っていなかったはず。しかし、一体だれがロニートにラビの死亡を知らせたの？そう考えると、ひょっとして・・・？そんなドヴィッドは今、ラビの後継者として追悼式ですべき挨拶の準備に忙しかつたが、それを尻目に、ロニートとエスティは？

日本では至る所に「ラブホテル」があるから、不倫や浮気はやりやすい。それに比べる

と、ロンドンのユダヤ人コミュニティでは至る所で監視され、密告されるシステムが貫徹しているようだから、ご用心！そう思っていたのに、ある日、2人が密会(?)し、某所で熱いキスを交わしているところを誰かに目撃されたから、さあ大変。しかし、用心深くすべきことがわかっているはずのWレイチェルがなぜこんなチョンボを？そう思ってしまっただけ、これは本作の重要なストーリー構成のための演出のためだから、仕方ない。その報告を聞いたドヴィッドが驚きかつ怒ったのは当然だが、それに対するユダヤ人コミュニティの反応は？そして、何よりもロニートとエスティの反応は？

■□別れ？逃亡？離婚？三者三様の選択は？■□

「ホロコーストはなかった」と主張する学者が、それを批判したユダヤ人の女性研究者を名誉棄損で訴えた1996年の「アーヴィング VS リップシュタット事件」をテーマにした映画『否定と肯定』(16年)では、タイトル通り「否定」と「肯定」の2択だった。しかし、本作におけるロニートとエスティ、そしてドヴィッドは、別れ？逃亡？離婚？を巡る、三者三様の3択の選択肢になる。

第1の選択肢「別れ」は、もちろんロニートとエスティがキッパリ別れること。誰が考えてもそれがベストの選択であることは明らかだが、そう簡単に「別れ」に踏み切れないのがロニートとエスティ本人たちだ。本作では、その選択に苦悩するWレイチェルの演技をしっかりと確認したい。第2の選択肢は「逃亡」。これは『卒業』(67年)のラストシーンで、ダスティン・ホフマン扮するベンジャミンが結婚式場でキャサリン・ロス扮する花嫁のエレーンを奪って逃亡したのと同じように、かなりムチャな選択。したがって、『卒業』のようにうまくいけばいいが、もし失敗すれば・・・？第3の選択肢は、エスティがロニートへの未練を断ち切れないことを知ったドヴィッドが堪忍袋の緒を切り、エスティに離婚を宣言すること。このケースでは、離婚原因の存在はハッキリしているから、ドヴィッドの要求は容易に認められるはずだ。

しかして、本作ラストに向けては、そんな三者三様の選択の苦悩が描かれていく。もっとも、ロニートとエスティにとってはその選択がすべてだが、ドヴィッドには死亡したラビの後継者としてユダヤ人コミュニティを引き継ぐ任務があったから、どうも彼の選択の苦悩はその点にも及んでいたい。しかし、彼がラビの後継者になるのは全員一致の結論だから、揺るがないもの。私はそう思っていたし、ユダヤ人コミュニティの人々も全員そう思っていたようだが、実は本作ラストにおけるドヴィッドのその点の決断は？

本作の結末について、このようにドヴィッドの選択も含めて考えれば、『彼女たちの選択』という邦題のサブタイトルは少し不十分な気がするが・・・。

2020(令和2)年2月18日記